

(スマイル会 2021 年 10 月、Zoom Meeting)

2021 年 10 月 07 日

梅津寿一

無知と無関心が民主主義を殺す！

はじめに

2018 年 6 月 27 日に神田の岩波ホールで、映画「ゲッベルスと私」を鑑賞した。速記とタイプ的能力を買われてナチス政権時代の国民啓蒙宣伝省に入り、ゲッベルスの秘書になった女性の、69 年の沈黙を破って当時を回想する映画だった。白黒映画なので、淡々と語る収録当時 103 歳(2013 年)の老女ポムゼルの顔の皺に圧倒された。1911 年生まれの彼女は、31 歳の時(1942 年)に国営放送局から宣伝省に異動し、1945 年 5 月のベルリン陥落直前まで宣伝省の大臣官房秘書室で勤務した。最後の数日間は逃げ出す機会をとらえようともせず、ベルリン降伏のときの白旗を同僚女性たちと一緒に縫っていたという。戦後はブーヘンヴァルト強制収容所跡に設立されたソ連の特別収容所に抑留され、5 年後の 1950 年 1 月に抑留を解かれ、幸いにも南西ドイツ放送局(バーデンバーデン)に拾ってもらえ、後に、ARD(ドイツ国営放送局)ミュンヘンに移り、1971 年 60 歳まで働いた。

2017 年 1 月 27 日、国際ホロコースト記念日にあたる日にミュンヘンで亡くなった。106 歳だった。

彼女はベルリンの内装業者の家庭の 5 人きょうだいの長女として生まれ、あとは男の子ばかりだったので多くを求められ、また服従を強いられる生活が常であった。服従は家庭生活の一部だった。

ポムゼルの語りは我々に何を教えるか

ナチの権力機構の中にいたおそらく最後の生き証人であるポムゼルは、21 世紀を生きる我々に、なぜ今、右翼のポピュリストと権威主義ひいては独裁政治がふたたび息を吹き返したのか、なぜそれが国際的なレベルで様々な形をとって現れるようになったのか、どのような原因が背景にあるのかを考える機会を与えてくれている。

あまりにも無邪気で陳腐にすら聞えるポムゼルの思い出話と、ナチの内部でキ

キャリアを積んでいったその動機を通して彼女を知るにつれ、現在の状況と比較せざるを得なくなる。

民主主義体制の下でも、主権者である国民が、ポムゼルのように、世の中の動きに無頓着で、権力の動きに目を向けず、自分の仕事や出世にばかり気を取られていれば、為政者は易々と、恣意的な政治、自分本位の政治を行うだろう。それに批判的精神を失ったメディアが追随すれば、民主主義はチェックとバランスの機能を失い、果てしなく劣化していく。これは、今の日本でも起きているのではないか。

ポムゼルの言葉

* 自分に与えられた場で働き、みなのために良かれと思ったことをする。誰かに害をなすかもしれないと、わかっている

も……。それは悪いことなのかしら、エゴイズムなのかしら。

それでも人はやってしまう。人間はその時点では、深く考えない。無関心で、目先のことしか考えないものよ。

* 宣伝省はとても良い職場だった。少しだけエリートになった気分だった。身なりの良い人ばかりで、みんな親切だった。

あの時の私はほんとうに浅はかだったのね。とても愚かだったわ。

* 私には、なにも罪はない。かけらも罪はない。だって、何の罪があるというの？

あの政権の実現に加担したという意味で、全てのドイツ国民に咎があるというのなら、話は別よ。そういう意味では、私も含めみんなに罪があった。

彼女が自己批判をしているのは、当時の自分が浅はかだったということだけだ。国家社会主義の犯罪に個人的に加担した罪があるとは認めていない。ドイツ国民全体に罪があるというのなら、それは別だ。

しかし、この考え方は、いつの時代にも、すべての人間は、最終的には自分自身の決断と、社会における自分の立場について責任を負わなければならないことを見落としている。

当時、広範な住民各層がナチに賛同せず、同時にナチの真の目標に無関心で無かったら、1930年代の歴史はおそらく違っていただろう。政治的無関心というものは、それ自体が罪なのだろうか？

彼女は熱心な党员ではなかった。また確信的なナチでもなかったし、「積極的に参加した」のでもなかった。しかし、彼女は自分自身の愚かさやナイーブさを盾にして自己弁護することで、問題をうやむやにしている。

「倫理的には、見ないふりをするだけでも罪である。なぜなら「生」とは常に「共生」を意味するからだ。このことは、普遍的な人間の権利が基本権の主要な柱になっている民主主義国家では重要になってくる。ところが昨今では、多くの人が民主主義のシステムに背を向けて、社会と人間が連帯しなくなるとどうなるかを考えようとしない。少なくとも

ポムゼルの人生を見ると、自分の職業的成功にしか興味がないような印象を受ける」(ハンゼン)。

ゲッベルスに仕えた職員の間で「最終解決」が実際にどれくらい話題になっていたかに関する情報は存在していない。また宣伝相の口述原稿にはタイピストのイニシャルがついていないので、誰が記録したのかはわからない。しかし、トップレベルの速記タイピストが、その内容について全く何も知らなかったというのは、想像しがたい。

注：ヒトラーの秘書・トラウデル・ユング(Gertraud Junge; Traudl)もホロコーストについて何も知らなかったと主張している。

「私はヒトラーの秘書だった」(草思社文庫、2020.08.10.)

ポムゼルの語りは、独裁の成立を黙認し、その後も独裁体制の下で、肉体的にも精神的にも生きる(生き残る)とはどういうことなのかを我々に示している。しかしまた彼女は、西歐的民主主義をないがしろにする昨今のポピュリストをただ傍観することが、何を意味するのかも示唆している。

「現在 106 歳のポムゼルの中にみられる「臆病さ」と非政治的な態度の中に、現在世界を覆っているある傾向がみられるからである。それは、難民の運命や、民主主義のエリートに対する激しい憎悪や、民主主義とヨーロッパ統合に宣戦布告した右翼ポピュリストたちの新たな台頭を目前にして示される、底知れぬ無関心と政治意識の低さと無力感である」

(ハンゼン)

ポムゼルの言葉

* 悪は存在するわ。悪魔は存在する。神は存在しない。だけど悪魔は存在する。正義なんて存在しない。正義なんても

のではないわ。

* ナチスに対抗して当時何かできることがあったのではないかと、現代の人が考えるのは当然かもしれない。でも、それ

は不可能だった。命がけでなければ、そんなことは出来なかった。

* 私はとにかく末端とはいえ、あの政治のろつぼの中に陥ってしまった。考えたって仕方がない。どうすれば防げたか

なんて、私にはわからない。間違った人に付き従ってしまう愚かな人間は、いつの時代にも存在するわ。

* ヒトラーが権力を手にした後では、すべてがもう遅かった。

ポムゼルの人生は、我々にとっては一種の羅針盤だ。開かれた社会に向けて取り組もうとする人々の心構えが見られず、民主主義のエリートたちにも、時代の誤った発展に適切に対処する能力がなければ、民主主義はすぐに危機に陥ってしまうことを物語っている。

1930年代と現代との類似点を探していくと、いやでも次のような疑問が湧いてくる。

トーレ・D・ハンゼン(Thore D. Hansen)の問題提起

・ヨーロッパやアメリカでは何が起きているのだろうか？

・新しい扇動家にまだ感化されていない住民の大半は、ちょうど22歳から34歳までのころのポムゼルと彼女の周囲の

人間がそうだったように、受動的で無知で無関心な態度で目下の情勢を眺めているのではないだろうか？

・現代の若者もやはり非政治的なのではあるまいか？

・現代の社会を担う中道派の市民、各世代が政治不信に陥っていること自体が、民主主義にとっての本質的な危機で

はないだろうか？

・民主主義のエリートは、徐々に膨張する政治不信の原因とその長期的帰結を無視し、自らの無力をさらしているの

はないだろうか？

・私たちは受動的な態度と無気力によって、またあの暗黒の1930年代に戻ろうとしている

・ポムゼルの人生から、現代の私たちを行動へと突き動かすヒントを引き出すことは出来るのだろうか？

新しい全体主義国家の誕生を見たくないのであれば、我々は1930年代のポムゼルの経験と彼女の矛盾に満ちた生涯

が、今起きていることといかに類似しているかを真剣に受け止めなければならない。

注：全体主義国家、ポスト全体主義、権威主義については添付資料2「習近平体制の本質」(豊永郁子)参照

一例をあげれば、今我々はトルコで独裁が成立する過程を目のあたりにしている。エルドアン大統領の下で、野党と議会とメディアを支配し、権力を確実なものにしているのは、平凡な官僚とポムゼルのような人々だ。エルドアン新体制で生き延びるために、権力の手先たちが民主主義、法治国家、トルコの人権の根幹をどれほど侵害してきたことか。アムネスティ・インターナショナルの推定によれば、多くのクルド人がこの一年に南東部から故郷を追われ、数万にも及ぶ公務員、教師、学者、政治家が、2016年のクーデター未遂事件後、追放されるか投獄された。トルコ議会は無力化され、大統領の権限が強化された。こうした兆候はナチ独裁が確立した当時を思い起こさせる。こうした状況下で、ポムゼルは、ユダヤ人職員が排除された後の国営放送局で職業人生の第一歩を踏み出していた。

ポムゼルの言葉

* あの頃と似た無関心は、今の世の中にも存在する。テレビをつければ、シリアで恐ろしい出来事が起きているのは分

かる。たくさんの人々が海で溺れているのが報道される。でもそのあとで、バ

ラエティ・ショーが放映され、人々は生活

を変えるわけではない。生きるとはそんなものだと私は思う。

ヨーロッパ諸国ではまだ大半の人々が「自由・平等・友愛」というヨーロッパ民主主義の基盤をなすフランス革命の理念を信奉している。しかしその存続が保証されているわけではない。

民主主義の価値をはっきりと押し出すことが重要である時代に、人々が沈黙して、受動的にふるまい、バラエティー番組ばかり見ていれば、過激な少数派は自分たちの世界像に合わない人々に対し、非難と憎悪をあおり、日常的な政治活動を抑え込もうとするだろう。嘘と憎悪の拡散によって仲間を増やし、最終的には権力まで掌握するかもしれない。自らの無関心と受動性によって倫理を崩壊させてしまう危険があるのだ。

トルコの独裁に戻る危険、ハンガリーとポーランドにおける民主主義の原則と法の支配の破綻、ドイツにおける AfD の躍進、オーストリアの FPÖ の勝利、フランス右翼のマリーヌ・ル・ペンなど、全体としてみると、欧州の平和秩序は、第二次世界大戦後最大の危機に直面していると言える。なぜなら右翼ポピュリストが宣言している目標は、ヨーロッパ統合の終焉であり、彼らは民族的に均質な国民国家への回帰を望んでいるからである。

ドイツにおける AfD の急速な台頭は、ワイマール共和国でナチ党が勢力を伸ばしてきた当時の勢いを思い起こさせる。1933 年の選挙で民主主義は終わった。

現今のヨーロッパは、おしなべて民主主義が不安定になっていると実感している。

アメリカでもトランプが大統領に選出された 2016 年、極右「オルト・ライト」はトランプの勝利で勢いづき、ヒトラーが権力を掌握した「1933 年のように祝おう」と人々を鼓舞した。(John Woodrow Cox: Let's party like it's 1933: Inside the altright world of Richard Spencer, *Washington Post Online*, 2016. 11. 22.)

「トランプ大統領はワシントンのリベラルなエリートとアメリカのマイノリティを軽視し、民主主義を骨抜きにし、弱体化しようとしている。それにメディアを利用する術をよく知っていた。ゲッベルスと彼のスピーチ、興奮した大衆の反応の記憶一つまり、単純で過激な方法を用いたデマゴーグによる民衆の扇動は、当時も今日も効き目があるのだ。

トランプは勝利演説の中で、自分は大統領に選ばれるまでに一つの「運動」を率いてきたと言っている。こう言うことで、彼は無意識に、自分は民主主義の既成の制度を基本的に認めていないとほめかしている。民衆の中から生まれた運動だとする論法は、民主主義を標榜する当局の監視を逃れるために、独裁的指導者がしばしば用いるものだ。トランプがもたらしたアメリカの政治的風土の汚染は数年間にわたって続くだろう」(Hansen)。

「トランプが単純に敵と味方を線引きするイデオロギー、内政重視、国際社会に背を向ける態度、彼の民主主義は多

元的で多様でもなく均質な民族で構成されている。これは法治国家ではなく、野党も存在しない別の形の民主主義で

ある」(Albrecht von Lucke: Trump und die Folgen: Demokratie am Scheideweg; *Blaetter fuer deutsche und international Politik*; 12/2016)

フォン・ルッケは、この種の民主主義国家において、ふたたび国民の意思が一人のカリスマ性を持つ指導者によって

実現されることを危惧している。かつてのナチのモットー、「一つの民族、一つの国、一人の指導者(フューラー)」の精神である。

ポムゼルの言葉

* 1933年より前は、誰もとりたててユダヤ人について考えなかった。あれは、ナチスがあとで発明したようなものだった。(中略) 私たちはユダヤ人に敵意などもっていなかった。父さんはむしろ、顧客にユダヤ人がいることを喜んで

いた。

* もちろん、愚かだったという点では私にも責任はある。でも、望んで愚かになる人などいない。第一次世界大戦に負

けた後、人々はみなこの国はまた甦ると期待した。ナチ政権の最初のころは、たしかにそうだった。戦争に負けて、講

和条約に盛り込まれるべきだったいくつかの権利も奪われて、意気消沈して

いた国民が再び元気を取り戻せた。

* あんな時代を生き抜くのはたいへんなことよ。上へ下へと、まるで波間にいるようだった。でも最後に考えたのは、私

自身の命や、私自身の運命だった。最後はみんな、自分のことしか考えていなかった。それについては時々良心が痛むわ。

2016年、アメリカ大統領トランプは自らの選挙戦において、イスラム教徒やその他のマイノリティを敵視する姿勢を示し、社会の雰囲気害した。このことは、伝統的に移民の国であり、多文化的な生活様式に理解のある理想の国として通っていたアメリカに決定的な影響を与えた。トランプ特有のレトリックは、最悪だったあの時代の記憶を呼び覚ました。ナチ独裁が確立した時期に見られた「**煽られた憎しみ**」と同じような仕組みが、ここでも芽を出している。

2011年9月11日の世界貿易センターテロ事件でイスラム教徒への攻撃が増加したが、数年後には沈静化していた。トランプが選挙に勝つ前から、マイノリティ、特にイスラム教徒を狙った犯罪件数が増加するのではないかと懸念されていた。実際、アメリカにおけるヘイトクライムの数は、2016年大統領選挙後、飛躍的に増加した。南部貧困法律センターによれば、選挙直後に900件以上の迷惑行為及びヘイトクライムが報告されている。

(Southern Poverty Law Center: Ten Days After: Harassment and Intimidation in the Aftermath of the Election, 2016

年11月)

イギリスにおいても、ブレグジットの国民投票の翌日に外国人に対する犯罪数が現実に数倍に増加したとき、イギリス人もショックを受け、右翼ポピュリストに対する不安と及び腰と無知が交錯しているようだった。ロンドン警察が国民投票の数日後に公表した数字は、国民投票前に東欧の移民を敵視する世論操作が行われたことが、犯罪発生件数に関係していることを裏付けている。ロンドンだけでも、2016年6月23日の投票日から7月末までの間に、人種差別に基づく犯罪が2000件以上も発生している。(Benedikt Peters: Gewalt gegen Auslaender geht nicht mehr weg, *Sueddeutsche Zeitung Online*, 2016年9月30日)

ドイツではどうだろうか？

1990年代に外国人嫌悪の動きが生じ、亡命希望者の収容所が攻撃を受けて死者が出るという事態になった。難民危機以来、ドイツ国内の雰囲気は先鋭化し、2015年だけでも難民収容施設を狙った攻撃は1072件もあり、そのうちの136件が放火事件だった。合わせて267名が負傷している。憂慮すべきは、こうした事件がAfDの台頭と足並みをそろえるかのように増加していることだ。AfDは外国人を嫌悪するスローガンを掲げ、過激な反イスラム運動「ペギーダ」と連携する動きも見せ、右翼の暴力事件件数の増加に一役買っている。2016年は前年と比べて、事件の件数が44%以上増えている。**問題なのは、1990年代と比べて、こうした襲撃に対して反対運動や抗議運動がほとんど起きていないことだ。**

1990年代には、襲撃事件の後には何週間もキャンドルを灯し、過激派に抗議する動きがみられた。1992年12月には15万人もの人々が「現在の彼らは、明日のあなただ！」を合言葉に開催されたコンサートに参加した。ミュンヘンでは、1992年12月6日に40万人以上が街に出て、外国人嫌悪と極右主義に反対して「キャンドルの鎖」を作った。(Giovanni di Lorenz: Als Muenchen Nein sagte, *Welt24 Online*, 2012年12月2日)

現在はどうだろうか？

ゲッベルスの秘書が恐ろしい出来事を口をつぐんだまま驚愕して見ていたように、手をこまねき、さっさと日常に戻ることができるのだろうか？

ヒトラーと国家社会主義の時代はかなり前から始まり、突撃隊はかなり前から活動を開始し、民主主義者が活躍する時代は終わっていたのだ。1923年のミュンヘン一揆で、国家社会主義の姿とイデオロギーは徐々に表立ってきた。ポムゼルが自分の世界に閉じこもり、政治動向に興味を示さなかったとしても、事態はゆっくりと進行していた。この過激化の兆候を認識することが大切なのだ。そして今日認められる危険の兆候は、十分すぎるほどで、極めて深刻である。

右翼ポピュリストは、特定の集団を劣等な競合相手と決めつけ、貶めることで、国民の最も卑しい本能を呼び覚ましている。自己価値観を持ってない人々

は、自分の心の平安を保ちたいがために、ふたたび他者を憎むようになってしまふ。軽蔑と憎悪は人々の集団的な自己価値観を高める結果を生み出すのだ。

2016年10月、チューリンゲン州議会のAfD議員団長ビヨン・ヘッケは公の場のスピーチで「エリート」の追放を要求した「・・・古い政党ばかりでなく、古いメディア、古いエリートもいるのだ。（略）わたしたちは、この古いエリートを処分しなければならないだろう」（トリーア近郊オスブルクにおける2016年10月11日の演説）

このアピールは、ナチスが権力を掌握する半年前の1932年7月、ゲッベルスがラジオで行った演説を思い起こさせる——「我々は、我々に敵対する政党や体制と話し合うつもりはまったくない、それらを遠ざけるしかない」（Joseph Goebbels: Der Nationalcharakter als Grundlage der Nationalkultur, *Rundfunkbeitrag*, 1932年7月18日）

それから1年もたたないうちに、ナチスは権力を握り政敵を排除していった。

2017年1月、ヘッケはベルリンのホロコースト記念碑を引き合いに出して、人々の大歓声を煽った——「私たちドイツ人、私たち民族は、首都の中心部に不名誉な記念碑を作った世界で唯一の民族です」。こうして彼は、殺された60万人ものユダヤ人への哀悼の思いを踏みにじり、歴史上最も重く、他に類を見ない規模の人類に対する犯罪を相対化したのであった。（Linken-Politiker erstattet Strafanzeige gegen Hoecke, *Spiegel-Online*, 2017年1月18日）

このようなアジ演説が行き着く先はどこなのかを知っているのに、何も感じないとしたら、私たちはひどい無知と無関心に陥っているということではないだろうか。

ヒトラーやムッソリーニが権力を掌握したときに、経済的な困窮から救われると淡い期待を抱いたり、暗黙の同意を与えたりしたポムゼルの世代とは異なり、歴史に学んだ我々は独裁制がどんな結果をもたらすか知っている。にもかかわらず、私たちの大多数は消極的なままなのである。

最後にポムゼルの言葉

* 私たちはほんとうに政治に無関心だった。今の女の子たちが自分の意見や考えをきちんと口に出せるのを見ると、自

分と引き比べてしまう。

* ゲッベルスは私にとって、少しばかり大声で叫ぶことのできる政治家にすぎなかった。彼が叫んでいる内容について、私は熟考しなかった。わけのわからない演説に、まともに耳を傾けなかった。今も、国会の演説には耳を傾けない。無駄なおしゃべりばかりだもの・・・。

て、私は熟考しなかった。わけのわからない演説に、まともに耳を傾けなかった。今も、国会の演説には耳を傾けな

い。無駄なおしゃべりばかりだもの・・・。

* あちこちの街角に、失業者や物乞いや貧しい人々がいた。でも人はそういうものを見たいとは思わなかった。そして

目を向けなかったから、見えなかった・・・。（了）

我々は、これ以上「見ないふり」をするわけにはいかない。社会の安定を約束した社会契約は壊されてしまっている。民主主義の価値が疑問視されている過渡期に我々は生きている。

ハンナ・アーレントの言う「悪の凡庸さ」を知っている我々は、民主主義の立場に立つ指導者に圧力をかけ、経済の再配分、気候危機の克服、対立している当事者間の平和交渉の促進等々、世界の諸問題に声を上げ続けなければならない。（了）

資料1: ポムゼル画像

資料2: 「習近平体質の本質」、豊永郁子(早稲田大学・国際教養学部教授)

参考書籍:「ゲッベルスと私」 ナチ宣伝相秘書の独白、ブルンヒルデ・ポムゼル

2018年6月16日映画公開、6月26日和訳出版(紀伊国屋書店)

無知と無関心が偏見と差別を生む。

—ハンセン病家族訴訟原告団長・林力さん

熊本地裁における「訴訟終結」時のことば (2019.07.12.)

(折々の言葉 その3、2019年・再録)